

2022年横浜ナザレン教会降誕節第八主日(2/13)礼拝説教

「主の復活の証人」

使徒言行録第1章 15 節から 26 節

【聖書】

使徒言行録 1:15 そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。百二十人ほどの人々が一つになっていた。16「兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書の言葉は、実現しなげなかつたのです。17 ユダはわたしたちの仲間の一人であり、同じ任務を割り当てられていました。18 ところで、このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。19 このことはエルサレムに住むすべての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケルダマ』、つまり、『血の土地』と呼ばれるようになりました。20 詩編にはこう書いてあります。『その住まいは荒れ果てよ、／そこに住む者はいなくなれ。』／また、／『その務めは、ほかの人が引き受けるがよい。』

21-22 そこで、主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人になるべきです。」23 そこで人々は、バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフと、マティアの二人を立てて、24 次のように祈った。「すべての人の心をご存じである主よ、この二人のうちのどちらをお選びになったかを、お示してください。25 ユダが自分の行くべき所に行くために離れてしまった、使徒としてのこの任務を継がせるためです。」26 二人のことでくじを引くと、マティアに当たったので、この人が十一人の使徒の仲間に加えられることになった。

1 再び、問う・イスカリオテのユダ なぜ？

牧師館の台所の勝手口を開けると、幼稚園のうさぎ小屋があります。今は寒い季節ですからウサギはいませんが、暖かな季節にはつぶらな目をしたウサギのピーターがいます。おそらく「ピーター・ラビット」から名付けられたのだと思いますが、雌だそうです。このようにピーターは、アメリカやヨーロッパなどキリスト信仰が盛んな国では、よくある名前です。かの国の人々は聖書の登場人物から名前を付けるからでしょう。中でも使徒達の名前は大人気です。使徒達の英語名を見ただけでも、よくわかります。ピーターはペトロの英語名だし、ヨハネの英語名はジョン。ヤコブは、ジェイムズで、アンデレは、アンドリュー、フィリポはフィリップ。英国王室にアンドリュー王子がいるし、エリザベス女王の配偶者はフィリップ殿下。トマスはトーマス、機関車トーマス、バルトロマイは、ちょっと珍しい「バーソロミュー」。マタイは、マシュー。赤毛のアンのおじさんの名前です。シモンはサイモン。サイモンとガーファンクルでおなじみです。日本人でも一度は聞いたことのある名前ばかり。

しかし、殆ど誰にも使われない使徒の名前があります。イスカリオテのユダです。自分の子

供に、主イエスを裏切り、悲惨な最期を迎えた者の名をつける人はいないでしょう。イスカリオテのユダについては、先週も触れました。でも、今週も触れたいと思います。21 節から22 節に、次のように語られているからです。「そこで、主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人になるべきです。」の「主の復活の証人」という言葉から、「主の復活の証人とはいったいどういう人たちなのだろうか」という想いが心に湧いて来たからです。それを知る為に、主の復活の証人となり損ねたイスカリオテのユダを見て行こうと思うのです。主の復活の証人なれたペトロ達と、なれなかったイスカリオテのユダ。先週は、「イスカリオテのユダは、主イエス・キリストに望みをおいて、自分の罪を悔い改めていれば、滅びずにすんだ筈だ」と言いました。では何故、イスカリオテのユダは、悔い改めることができず、ペトロ達は悔い改めることができたのでしょうか。

2 神を神とする

イスカリオテのユダは、謎が多い人物ですが、一つだけはっきりしている事があります。彼は、最後まで神を神とできなかつた、という事です。ユダは、自分の都合のよいように神を、主イエスを動かそうとしました。ユダは、神を自分に願いを都合よく聞いてくれる存在、ドラえもんのように考えたのです。しかし、神はドラえもんではありません、ユダの思うようにはいかない。だから、ユダは、一方的に神を捨てました。

先ほど、一緒に祈った主の祈り。最後は、一度聞いただけでは意味が分からない不思議な言葉です。「国と力と栄とは限りなく汝のものなればなり」どの国にも支配者がいます。支配者とは、人々を裁く権利を持つ人です。だから、「この世界を裁く権威を持っておられる栄えある方は、主なる神よ、あなたお一人です」と主の祈りの最後は神を讃えているのです。

ですから、神を神とすることは、真実に決定的にこの自分を裁く事ができるのは天の神さまのみだ、と受け入れることだと思います。神をドラえもんのように、自分の願いを都合よく叶えてくれる存在としている限り、話は逆になります。ドラえもんである神を、人間が裁くのです。それが、ユダや、祭司長や律法学者たちが、主イエス・キリストに対してしたこと、神に対してしたことです。

3 復活の証人

その事を、主イエス・キリストの十字架から見ていきたいと思えます。主イエスの隣で十字架に架けられていた犯罪者は、十字架に釘づけられている時の主イエスの祈りを聞きました。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」主の傍らで十字架に釘づけられていた犯罪者は、主のこの祈りの中に、何を見出したのでしょうか。

神を見出したのです。真に裁く事のできる者だけが、徹底的に赦す事ができるお方であ

る、という真理を犯罪人の一人は見出しました。自分を殺そうとする者が滅びないように、と執り成しの祈りをするイエスに、神にしかできない徹底した赦し、救いを見出したのです。そして、この犯罪人は、地上での人生の最後の最後に、真の神を神として次のように言います。「イエスよ、あなたの御国においてになる時には、私を思い出してください。」そんな彼に主は言います。「あなたは今日、私と一緒に樂園にいる」彼の救いを約束されたのです。

一方、イスカリオテのユダは、主の十字架に神の救いを見出すことができませんでした。彼は、神を役に立つか立たないかで裁いてきました。神を真実に裁くことが出来る方としなかったからこそ、主イエスの十字架に真の救いを見出すこともできなかったのです。真の神なき者として生きたユダ、最後は自分自身を裁くしか道は残っていませんでした。自分自身に絶望したら、もう彼を支えるものは何もないからです。

しかし、絶望したのは、ペトロ達も同じでした。そして、ペトロ達も十字架上で敵を許すイエスに、神を見出すことは出来ませんでした。ですがし、ペトロ達は、共に暮らした主イエスの言葉と行いを思い起こす事ができました。ペトロが三度主イエスを拒んだ後に、鶏の鳴き声から主イエスの「あなたは鶏が鳴く前に三度、私を知らないという」という言葉を思い起こしたように。主イエスがどれだけ深く自分達を愛して下さったかを、彼らがかろうじて思い起こす事ができたのです。だから、死なずに済んだのだと思います。誰かに深く大きく全面的に愛されていることに気づいた時、自分に深く絶望しても、人は死なずに悔い改めることができるし、命への希望を失わずにすむのだ、と思わされます。そうしてペトロ達は、主の十字架から三日経って、甦りの主イエスに会う事ができました。この甦りの主イエスに会い、復活の命を知ることによって初めて、彼らは、敵を許す十字架の主イエスに、神を見出す事ができたのだと思います。厳しい神の裁きの向こうに、永遠の命を見出し、徹底した神の拒絶さえも呑み込み、押し流す愛の言葉、「あなたが生きていることを私は喜ぶ」という神の言葉を聴いたのです。だから、彼らは主の復活の証人となる事ができたのです。復活の証人とは、十字架と復活の主イエスに神を見出す者、罪の赦しと永遠の命を見出す者。そして、十字架の主イエスと共に古い自分に死に、甦りの主イエスと共に生きる者だと言ってよいのではないかと思います。

ですが、何故、ペトロ達は、イエス・キリストを思い起こす事ができたのでしょうか。福音書には、ペトロが主イエス・キリストと共に、実に素直に率直に対話しているエピソードが幾つも出てきます。時には偉そうに主イエスに意見して、「退け、サタン」と叱られたこともあります。この「退け」というのは、「私の後ろに回りなさい、私の前を行こうとするな」という言葉です。そのような交わり、対話を通じて、ペトロは、主からの愛を受け取り、主への愛を増していたからこそ、最も深い危機にある時、イエスを思い起こす事ができたのでしょう。

一方、イスカリオテのユダは、イエス・キリストと心を開いて対話するエピソードは残されてはいません。それは意味深いことのように思います。日頃からイエス・キリストに心を開き、対話しつつ歩むことこそ、復活の証人にとって重要な事なのかもしれません。

しかし、イスカリオテのユダは他人事ではありません。ペトロも言っているように、彼は私達の仲間です。私達の中には、神になろうとする自分がいます。だからこそ、私達は謙って自己吟味して歩みたい、と願います。神を神とできない自分に、キリストと共に死に、キリストと共に新しい命に甦らせて頂きたいと祈ります。

私達がそのように自分自身の心を吟味し悔い改めることができる為に、神はイスカリオテのユダにサタンが入ることを許したのかもしれませんが。16節の「この聖書の言葉は、実現しなければならなかったのです。」の「ならなかったのです」と訳されている言葉もやはり、神の意志を表す特別な言葉ですから。

4 マッティアの選出

イスカリオテのユダは、自分の役割を完全に終えたからこそ、十一人の使徒に新たな一人が加えられることとなりました。22節の終わり「そこで、主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、…、いつも一緒にいた者の中からだれか一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人になるべきです。」とある「なるべきです」も先ほど言いました、神の意志を表す特別な言葉だからです。

さて20節から21節は興味深い所です。使徒としての資格が記されています。使徒達は、先ず第一に主イエスと共に生活した者であり、地上の主イエスの目撃証人。滅びの証人として去って行ったイスカリオテのユダの代わりに新しく選ばれる者は、イエス・キリストの十字架からの復活を証する者でなくてはなりません。

「そこで人々は、バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフと、マティアの二人を立てた」とあります。ここの「人々は」が、百二十人の兄弟たちか、十一人の使徒達を指すかは、はっきりとしませんが、二人の候補者が、復活の主と出会い主の言葉通りに聖霊なる御神が降るのを祈り待ち望む人々によって、選ばれているのは興味深いことです。そして、最後はくじで決着がつけられます。2000年前の古代世界では、籤は神の御心を示す、と信じられていました。最初に二人の候補を人間が選び、最後は神の御心に聴く。まるで神と人間が対話しつつ、一人の使徒を選んでいくようです。

その二人の候補者は、ローマ名はユスト、「バルサバ」は綽名で、「安息の子」という意味があったようです。ヨセフはユダヤ名です。その名前からエルサレムの名門の出だと推測される人です。一方のマティアは、綽名もなく二番目に記されていることから、明らかに軽い扱いです。どうやら人間の側は、ユストの方を強く推していたようです。ですが、籤で選ばれたのは、マティアでした。人の想いと神の想いは、かくも異なるものだ、それを忘れずにいたいものです。

さて、マティアがイスカリオテのユダに代わって果たすこととなった「使徒としてのこの任務」は、いったい何でしょうか。ここの「任務」と訳されている単語は、もともとは食卓で給仕する仕事、つまり、僕の仕事、奉仕する務めを示す言葉が使われています。使徒達は、復活

の証人となることで、群れの人々に、そしてこの世界中に仕える者であることが分かる箇所です。教会は、まだこの世に生まれ出る前から、復活の主イエスを証することで、この世に仕えていく務めを神から与えられていたことがよくわかる言葉です。

5 聖霊と共に

さて、先ほど、神と人々とで対話しつつ、マティアを選出した、と申しました。この後も、教会や使徒達が様々な決断をする場面は何度も出てきます。しかし、使徒言行録では、くじを引いて神の御心を確認するのは、マティアの選出が最初で最後です。では、聖霊が降ってからは、どのように判断しているのでしょうか。その都度その都度、祈りつつ、聖霊なる御神と対話しつつ、判断を仰いでいます。神と人々とで対話しつつ、マティアを選出した、という事は、やがて降ってくださる聖霊なる御神と教会の関係をよく表しています。聖霊なる御神は私達の心に、また私達一人一人の間に確かに働かれますが、決して私達を操り人形のように支配しようとはせず、私達が、自分を小さくして、謙って聖霊なる御神に場所を明け渡して初めて、大胆に力を発揮してくださいます。その時も私達の意志を無視したりはなさいません。私達は、この聖霊なる御神の導きの中で、主イエス・キリストの復活の証人として成長していく、変えられていきます。

主イエス・キリストは、復活されてから四十日間、使徒達と共に過ごされ、父なる御神のみもとに帰って行かれました。そして聖霊なる御神が祈る群れの上に降ったのは、主イエスの復活から五十日目の五旬祭の日。つまり、イエス・キリストから離されてから聖隷降臨までの九日間、使徒達とその仲間は、心をつにして祈り続けました。勿論、彼らにはいつ聖霊なる御神が降ってくださるかは知らされていないのですから、必死の祈りであった、と思います。そして同時に、互いを励まし合い、支え合う祈りでもあったでしょう。彼らの周りは敵ばかり、しかし守ってくださる主イエスは、既にいません。到底祈り合い支え合わなければ切り抜けることはできなかった筈です。ここに、天の御神が、主の昇天と入れ替わりにすぐに聖霊を降されるのではなく、九日間待たれた理由があるように思います。天の御神は、必死な九日間の祈りを通じて、自分の為だけでなく、仲間の為に祈る者へと使徒達とその仲間を変えてくださいました。何より復活の主イエスこそ、先ず他の人々の為に祈る方だったから、使徒達を先ず祈りにおいて主イエスに倣う者としてくださったのです。この九日間の祈り、ここに教会の祈りの基礎があると行ってよいでしょう。

時に神を神とできない私達、しかし、天の御神は、きちんと時を備え、そのご計画に私達を用いてくださり、その中で私達を成長させてくださいます。その時々に応じて成長させてくださる。父なる御神の慈しみのなんと深いことか、細やかなことか、完全なことか。そのみ名を賛美せずにはおられません。